地域情報（県別）

# 【宮城】上司の助言で「自分の武器をきちんと持とう」と強く決意-関口拓矢・宮城整形外科　スポーツ・ウェルネスクリニック院長に聞く◆Vol.2

まだ地域で普及していない再生医療を提供したい

2025年1月14日 (火)配信 m3.com地域版

「宮城整形外科　スポーツ・ウェルネスクリニック」（黒川郡大和町）の関口拓矢院長は、治療の選択肢を増やすため、地域でまだ導入例の少ないPRP（多血小板血漿）療法の提供準備を進めている。自身もケガに悩まされた経験から整形外科医を志し、「患者の気持ちや将来まで考えた診療」を心がけているという関口氏の目指す地域医療の形を語ってもらった。（2024年11月14日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

## 肩関節の疾患「完全に解明されていないからこそやりがい」

**――関口院長が整形外科医を目指したきっかけはなんですか。**

小学校ではソフトボール、それ以降は野球を行ってきましたが、成長期に膝や腰の痛みが強く出てプレーできない時期もあり、整形外科を受診することがたびたびありました。レントゲンを撮り、物理療法を行って、湿布を処方される、どこも判を押したように同じ治療であることや、それでなかなか良くならないことに疑問を感じていました。

もともとスポーツに関する職業をと考えており、理学療法士を検討したこともありました。しかし、「痛みの初期段階で正しく診断する役割になるには、整形外科医にならなくてはならない」と高校の途中で決意し、そこから医学部を本格的に目指しました。高校生になると、野球部のチームメートが腰を痛めて途中でリタイアしたり、肘を痛めて最後の大会に出られなくなってしまったり。その中で、「自分が良い医療を提供できる人間になりたい」と思いを強くしました。

関口拓矢氏

**――肩関節外科を専門に選んだ理由はなんですか。**

自身が学生時代に野球を行っていたことから肩・肘関節障害にはもともと興味がありました。進学した福島県立医科大学医学部の準硬式野球部に入部してすぐ肩を痛めてしまい、結局野球部を引退するまで痛みを抱えていました。今の自分だったらなぜ痛めてしまったのかが分かりますが、当時は理由が分からず、自分の悩みを何とかしたいという思いがまずありました。

また、日常生活の中で発症する肩腱板断裂や、かつて五十肩と呼ばれていた凍結肩は、なぜ発症するのか、なぜ有訴化するかなど、まだ不明な部分が多いです。自然に改善する人もいれば、なかなか治らずに「五十肩だから仕方ない」と我慢している人もいます。せっかく病院に行っても年齢のせいだといわれ満足のいく治療を受けることができない人もいます。完全には解明されてないからこそやりがいがあり、自分が勉強し患者さんに良い治療を提供したいと考え選択しました。

**――勤務医時代に学んだことや印象に残っていることはありますか。**

初期臨床研修を行った竹田綜合病院（福島県会津若松市）での経験は今でも生かせていることが多いです。当時から院長を務めている本田雅人先生は整形外科が専門で、技術だけではなく志についても教えてくれることが多々ありました。

当時、専攻医研修に進むタイミングで、スポーツ整形外科が盛んな病院に移ろうかという思いもありました。院長に相談したところ、「肩でも肘でも膝でも、自分が責任を持てる専門を持たないといけない」「スポーツなんてふわふわしたこと言っていると患者は治せない」とお叱りを受けましたね。酒席でしたので院長が覚えているか分かりませんが、私もその言葉に納得して、「自分の武器をきちんと持とう」と強く決意し、その後も竹田綜合病院で経験を積ませてもらいました。

肩の勉強をする前に頚、腰、膝、股関節といった変性疾患の診療や手術にも数多く携わりました。上級医もいろんな経験をさせてくれた上で相談に乗ってくれる方ばかりで、一個一個覚えながら成長できたという実感があります。一般的な後期研修医だと、骨折などの外傷の経験がメインとなり、変性疾患の手術を主導することは少ないと思うのですが、私は自身で外来診療した患者さんの手術を組み、上級医に一緒に手術に入ってもらうという経験をかなり多く積ませていただきました。

## 治療の選択肢を増やすためPRP療法の導入目指す

**――今後、注力したい取り組みはありますか。**

導入に向けて準備を進めているのが再生医療です。PRP療法の提供に向けて、既に厚労省に申請しており、許可が下りるのを待っている段階です。PRPは血液中の血小板を濃縮したもので、濃縮された血小板には多量の成長因子が含まれています。PRPを患部に注射することで、組織の修復などに効果が期待できます。具体的には、肉離れ、靭帯損傷、変形性関節症などに対して使用予定です。

JR仙台病院（仙台市）ではPRP療法を実施できる環境が整っており、在籍した4年間で学ばせてもらいました。私自身は、野球選手の肘尺側側副靭帯損傷に対して実施する機会があり、その効果を実感していました。また、サッカーJ2ベガルタ仙台、マイナビ仙台レディースのチームドクターをしている板谷信行医師がおり、サッカー選手の肉離れや腱付着炎、変形性膝関節症に対してPRP療法を実施し効果を発揮するのを間近で見てきました。

仙台市内の総合病院でもPRP療法を取り入れているところは少なく、私の知り得る限りだとJR仙台病院とJCHO仙台病院くらいでしょうか。近隣の整形外科クリニックでの導入例はまだ聞いたことがありません。

開業当初からいずれはPRP療法を行いたいとは思っていたのですが、こんなに早く取り組む予定ではありませんでした。導入を早めた理由は、患者さんの治療選択肢を増やしたいからです。炎症や痛みを取り除くためにステロイド注射をすることもありますが、組織のダメージが進むなどのデメリットがあります。また、変形性関節症に対してのヒアルロン酸関節内注射には効果が限定的な方もいます。本来は手術が望ましくても、なかなか踏み切れず痛みを我慢している方もいます。

PRP療法は、そういった保存治療と手術治療の間にいる患者さんの受け皿になり得ます。自由診療であるため、費用面も含めて患者さんと相談しながらになりますが、クリニックとして提示できる選択肢が増えることは意義がある

と考えています。

クリニックの屋内リハビリ室

## 会話を通して患者の「やりたいこと」を早めに引き出す

**――理想とするのはどのような医師像ですか。**

まずは地域住民の痛みや痺れなど困りごとに何でも対応できる存在でありたいと思っています。一般整形外科診療をベースに、肩関節外科、スポーツ整形外科などの専門診療、今後導入予定の再生医療の提供をバランス良く行っていきたいです。

いずれはメディカルチェックなどの地域貢献などに携わるのも良いのですが、今は「忙しいから受け入れられない」ということがないように、来院してくれた患者さんをしっかり診ていくこととその環境整備が大切だと思っています。スポーツ実施の有無やそのレベル、年齢などに関わらず、痛みで困り来院した人を平等にサポートしたいです。

心がけているのは、それぞれの患者さんの気持ちや将来まで考えて診療すること。特に成長期に発生した障害は経過も含めて個人差が大きく、誤った治療を行うと数年後に症状が強く出るケースや、障害が残るケースもあるので、成長スピードも考慮しなくてはなりません。

例えば、スポーツ大会に合わせてタイムスケジュールを組んだ治療を希望している場合、小中学生には将来の体への影響を考えて、希望に反してストップをかけることがあります。一方で、高校3年生の最後の大会で競技自体から引退を考えているケースなどは、何とか出場できるようにサポートすることもあります。障害の重症度だけでなく、そういった個人の事情、年齢、競技継続の希望などのバランスを見て、最善の治療を提案するよう心がけています。

患者さんの思いをくむためにも初診はかなり大事なので、時間をかけてコミュニケーションを取っています。最初の段階で方針を話し合って理解してもらえれば、次回以降は経過が悪くない限りはスムーズに進むことが多いです。会話を通して患者さんの「やりたいこと」を早めに引き出すのがとても重要だなと感じています。

**◆関口 拓矢（せきぐち・たくや）氏**

2009年3月福島県立医科大学卒、4月より財団法人竹田綜合病院。2013年10月東北大学病院、2014年4月～2015年3月JCHO仙台病院。2014年4月東北大学大学院医学系研究科整形外科学分野大学院。2018年4月岩手県立中央病院、2020年4月JR仙台病院整形外科。2024年より宮城整形外科　スポーツ・ウェルネスクリニック院長。

【取材・文＝福岡美幸】（写真はクリニック提供）

**記事検索**

ニュース・医療維新を検索